

パート 1



R.J. Palacio

オーガスト

この子がわたしのゆりかごに舞いおりたとき、
運命の女神がほほえんだ。

—ナタリー・マーチャント「ワンダー」より

ふつうってこと

自分がふつうの十歳の子じゃないって、わかっている。といっても、もちろんふつうのことをするよ。アイスクリームを食べる。自転車に乗る。ボール投げをする。ゲーム機を持つてる。そういうことでいえば、ぼくはふつうってことになる。ふつうの感情もある。心の中はね。だけど、ふつうの子なら、公園で会った子に悲鳴をあげられて、逃げられることはない。どこかへ行くたびに、じろじろ見られることもないよね。

もしも魔法のランプを見つけて、一つだけ願いをかなえてもらえたら、めだたないありきたりの顔になりたい。外を歩くとき、じつと見られてさっと目をそらされないようになりたい。

だけど今では、自分の外見に慣れちゃっている。人が顔をしかめているのだから、気づかないふりをする。ぼくの家族、パパもママも、ヴィア姉ちゃんも、そういったことはだいたいぶ前からうまくできるんだ。いや、お姉ちゃんはずうまくないな。失礼な人にはかっとなっちゃう。

お姉ちゃんはぼくをふつうだと思っていない。そう思ってるって言うけど、ふつうの弟なら、こんなにまでするうとしないよね。パパとママだって、ぼくをふつうだと思っていない。特別ないい子だなんて言う。

ぼくがふつうだってわかっているのは、世界中でただ一人、ぼくだけなんだ。

ところで、ぼくの名前はオーガスト。オギーと呼ばれることもある。外見については説明しない。君がどう想像したって、きつとそれよりひどいから。

学校へ行かなかったわけ

来週、ぼくは五年生になる。今まではママから勉強を教わってきた。だから本物の学校ってものに、一度も通ったことがない。小さいころから手術ばかりしていたせいなんだ。生まれてから二十七回もしたんだよ。

毎年二、三回、大きい手術や小さい手術を受けてきた。ぼくの体は年のわりに小さかったし、今の医学ではわからない問題がいくつもあった。だからパパとママが、学校へ行かせないほうがいいと決めた。でも、今は前よりずっとじょうぶになった。

ぼくが生まれたときのこと

ぼくがママのお腹にいるとき、こんな外見の赤ちゃんが生まれてくるなんてだれも思っていなかった。ぼくが生まれた夜、分娩室には二人の看護師さんがいた。一人はやさしくて親切だった。けど、もう一人は、まったくやさしくなくて、ぜんぜん親切じゃなかった。その人はとても太い腕をしていて、ひっきりなしにおなをししていた。

さて、とうとうぼくがママのお腹から出てくると、分娩室はシーンと静まりかえったそうだ。ママはぼくを一目見ることにすらできなかった。というのも、あの親切な看護師さんが、大あわてで部屋の外へ連れ出したんだ。その後を、パパがこれまた大あわてで追っかけた。ママは不安で起きあがろうしたんだけど、おならの看護師にごつつい腕でおしもどされた。ママはヒステリーを起こし、おならの看護師さんは「落ちつきなさい」ってどなりつけたらしい。それで、二人して医者になんとかしてーって叫んだら、なんと医者は、気絶していた！ それを見たおならの看護師さんは、足で医者体をぐいぐい押しながら、わめき続けた。

「医者のかせに！ 起きて！ 起きなさいよ！」

そしてとつぜん、おなら史上最大のおならをしたんだ。とんでもなくすごい音で、とんでもなくクサイやつ。でもまあ、そのおならのおかげで、医者は目をさましたんだって。

ママは、この話をするときはいつも、お芝居でもしているかのように身ぶり手ぶりをつけて語ってくれる。

しかも、おならの音真似つきでね。だから、すごく、すごく、すごい、おかしいんだ。
結局のところ、おならの看護師さんは、とても親切な人だったらしい。ずっとママのそばにいてくれて、
パパが先生からぼくの具合が悪いと聞いてもどつてきたあと、つぎの日、一晩もちこたえたぼくと初めて
対面するときも、その看護師さんはママの手をぎゅつとにぎつてくれていたんだって。
ママは初めてこのぐちゃぐちゃな顔を見たとき、ただ、なんてきれいな目なの、とだけ思ったらしい。

クリストファーの家

この春、家族でクリストファーの家に遊びに行った。キッチンでおやつを物色していたら、ママたちの話
し声が聞こえてきた。ぼくは秋から学校へ通うって、ママが話してたんだ。そんなこと、初耳だ。

「ママ、どういうこと？」

ママはびっくりしたようだった。ぼくに聞かせるつもりはなかったみたいだ。

「イザベル、オギーに話してやるべきだ」パパが言った。

「あとで話しましょうね」

ママはそう答えたんだけど、ぼくは言いかえした。「いやだ。なにを話してたのか、今教えて」

「オギー、もうそろそろ学校に行ってもいいって思わない？」

「思わない」

「パパも思わない」とパパが口をはさんだ。

「じゃあ、もうこの話は終わりだよ」ぼくは肩をすくめると、赤ちゃんみたいに、ママのひざにすわった。

「ママが教えられることだけじゃなく、オギーはもっといろんなことを勉強したほうがいいと思うの。たと

えば、分数なんて、ママはすごく苦手でしょ？」

「行きたくないよ」小さな子みたいにあまえた声で返事をした。わざとだけど。

「オギー、いやなら、行かなくていいんだよ。パパたちは、無理やり行かせるつもりはないんだ」

「でも、オギーのためなのよ、ネット」

リサおばさんがママに近よって手をぎゅつとにぎったんで、ママはおばさんの顔を見た。

「どうするのがいいか、答えは見つかるわ。いつもそうだったじゃない」おばさんがママに言う。

「あとで話すことにしましょう」ママが言った。

きつと夫婦げんかになる。パパに勝ってほしい。だけど、心のどこかで、ママの言うことが正しいって
わかった。だって、ほんとうにママは分数がすごく苦手だから。

帰りの車の中

家までの帰り道、ぼくは車の後ろの座席で眠っていた。どれくらい眠っていたんだろう。目が覚めると、
窓の外に満月が見えた。そのとき、パパとママが、小さな声で、ぼくのことを話していたんだ。

「ずっとあの子を守り続けることはできないわ。目を覚ませば夢でしただけのことにはならないの。だって、
現実なんだから。その現実はどう取り組むのかを学ばせるのが、わたしたちのすべきことでしょ……」

「だから、あの子を学校に送り出すっていうのはい。まるで屠殺場とくつばに引かれていく子羊のようじゃないか」

パパはすごく怒って話してただけ、ぼくが起きているのをミラーミラー越しに見て、だまってしまった。

「屠殺場に引かれて行く子羊みたいって、どういうこと？」ぼくは眠い目をこすりながら聞いた。

「オギー、寝てなさい」パパがやさしく言った。

「みんなきつとぼくのことをじろじろ見るよ」ぼくは泣きだしてしまった。

「オギー……」助手席のママが後ろをふりむいて、手をぼくの手に乗せた。「ねえ、行きたくないのなら無理に行かなくてもいいわ。だけど、校長先生と話をしておギーのことを伝えたら、すぐく会いたがっていたの」

「ぼくのこと、なんて言ったの？」

「おもしろくて、やさしくて、かしこい子ですって」

「他にもなにか教えた？」

「今までの手術のことをすべて話したわ。とても勇気があるってこともね」

「じゃあ、校長先生はぼくがどんな姿かもわかってる？」

パパが答えた。「去年の夏にモントークの海で撮った写真を持っていった」

「パパも行ったの？」正直言って、パパもいっしょにこのことを進めてたなんて、ちょっとがっかりした。

「そうだよ。パパもママも校長先生と話した。とてもいい先生だ」

「きつとオギーも好きになるわ」ママが言い足した。なんだかパパとママが二人で組んでいるみたい。

「ぼくは、学校に行きたくない」腕を組んで答えた。

「オギーのためにすることよ」

「来年からなら、行く気になるかも」

「オギー、今年入るほうがいいのよ。なぜかわかる？ 五年生になるでしょ。ちょうど中等部の一年目なの。どの子にとつてもね。だから、一人だけ新入りってことにならないのよ」

「こんな顔なのは、ぼく一人だよ」

「かんたんなことだとは言わない。だれよりオギーがわかってることだもの。でも、自分のためになる。た

くさん友だちができるし、ママとの勉強では教われないことを学べるの」

「行きたくない」

「じゃあ、こうしたらどう？ せめてトウシユマン先生に会ってから、決めたらいいんじゃないかしら？」

「トウシユマン先生ってだれ？」

「校長先生よ」

「ほんとにトウシユマン先生っていうの？」ぼくはくりかえした。

「だよな？」パパが、にやりとしながらバックミラーの中のぼくを見る。「こんな名前、ありかよってなあ。おしり男トウシユマンだぜ。ミスター・おしり男なんて名前であれしい人なんかいるもんか」

思わずにこっとしちゃったよ。パパはいつだってみんなを笑わせてくれる。

パパが、楽しげに言う。「なあ、オギー、学校へ行つて、トウシユマン校長が校内放送で呼びだされるのを聞いたほうがいいって！ 笑えるぞ。おしり男先生トウシユマン、おしり男先生トウシユマン、至急おもどりください。お仕事をし

り切れとんぼにしないでください。おしりに火がつくまでやらないんじゃ困ります！」

パパったら、かん高いおぼさんみたいな声を出すんだよ。思わず笑いだしちゃった。

「んん、トウシユマン先生ってだれ？」

お姉ちゃんが寝ぼけ眼で聞いた。ちょうど目を覚ましたんだ。

「ぼくが通う学校の校長先生だよ」ぼくは言った。

トウシユマン校長先生とミセス・ガルシア

新学年がはじまる数週間前、ママとピーチャー学園に行ったときは、トウシユマン先生を見て笑いだし

ちゃった。だけど先生は、ぼくが頭に描いていたのとぜんぜんちがった。大きなおしりをしているんじゃないかって想像してただけど、そんなことはなかった。すぐくふつうの人だった。背が高くやせていて、年はとっているけど、年寄りって感じじゃない。やさしそうだ。先生はまずママと握手をした。

「こんにちは、トゥシユマン先生。またお会いできて光栄です。息子のオーガストです」

トゥシユマン先生はまっすぐぼくを見て、ほほえみ、うなずいた。そしてぼくに手を差し出した。

「やあ、オーガスト。よくきてくれた」先生は、まったくふつうに言った。

「はじめまして」ぼくは小さい声であいさつをすると、先生の手をそつと握った。下をむいていたので先生の靴が見えた。赤いアディダスだ。

「お父さんとお母さんから、君のことをいろいろ教えてもらったよ」先生はぼくの前でかがんで言う。もうスニーカーを見ているわけにはいなくて、先生の顔を見た。

「どんなことを聞いたの？」

「今、なんと言ったのかな？」

「オーガスト、はつきり話さない」ママが言った。

「たとえばどんなこと？」ぼくは、口ごもらないように聞いた。

「読書が好きで、美術が得意だそうだな。それから、理科は特に好きなんだってね」

「うん」ぼくはうなずいた。

「このビーチャー学園には、おもしろい理科の選択科目があるんだ。どれかをとるといいぞ」

「うん」でもぼくは、選択科目ってのがなんのことなのか、まったくわからなかった。

「さて、それじゃあ、校内見学ツアーに行こうか」

「今からですか？」

「映画にでも出かけると思ってたかな？」先生はにこつとして、立ちあがった。

「そんなことするなんて、教えてくれなかったじゃないか」ぼくは責めるようにママに言った。

「オギー……」ママがなにか言いかけると、先生がこう言った。

「うまくいくよ、オーガスト。約束する」先生は手をさし出した。ぼくと手をつなぎたかったんだろうけど、ぼくはママの手を取った。先生はほほえみ、入り口にむかって歩き出した。ママがぼくの手をぎゅつとにぎりしめた。それが「大好きよ」のぎゅつなのか、「ごめんね」のぎゅつなのか、わからなかった。

ぼくたちはトゥシユマン先生のあとについて廊下を歩き、小さな部屋に到着した。ドアには「中等部校長室」と書いてある。中に入ると、やさしそうな女の人が机のところすすわっていた。

「ガルシアさんだ」トゥシユマン先生が紹介すると、女の人はにこつとして、いすから立ちあがった。そのとき、いつものことが起きた。今まで百万回もされたこと。ぼくと目が合うと、ガルシアさんはさつと目をふせたんだ。あつという間のことで、顔はまったく動かなかったから、他の人はだれも気づかなかっただろう。ガルシアさんは愛想よくにこにこした。

「オーガスト、はじめまして。ようこそビーチャー学園へ」ガルシアさんは握手しようと手を差し出した。

「こんにちは」ぼくは小さい声で言いながらその手を握った。

「あらまあ、力が強いだね」ガルシアさんの手はあたたかい。

「オーガストの握力はヘビー級だよ」トゥシユマン先生が言うと、ぼくの頭の上でみんなも笑った。

「校長先生の手伝いをしているの。ミセスG^ジって呼んでちょうだいね。みんなそう呼ぶの。ミセスG^ジ、ロッカーのかぎを忘れました。ミセスG^ジ、遅刻届の用紙をください。ミセスG^ジ、選択科目を変更したいんですが」

「ミセスGこそ、この学校を動かしてる人物だ」トゥシュマン先生の言葉に、大人たちはまたそろって笑った。そのときママが、ミセスGの掲示板上に貼ってある写真を指差した。「かわいい赤ちゃん。お子さんですか？」ガルシアさんは、うれしそうにほほえんだ。さっきまでの愛想笑いとはぜんぜんちがう。

「まあ、とんでもない！ なんてうれいしことを言ってくれるのかしら。孫ですよ」

ママはうなずいて、にっこりした。

ミセスGはもつと孫のことを話したそうだったが、とつぜん、真剣な顔になって言った。

「オーガストのことは、わたしたちにおまかせください」

ミセスGが一瞬ママの手をぎゅっとにぎった。そのときほくは、ママの顔を見て気がついた。ママも、ほくと同じくらい緊張してたんだ。ほくは、たぶんミセスGを好きだと思う。あの愛想笑いをしてなければね。

ジャック・ウィルとジュリアンとシャーロット

校長室のドアのむこうで、子どもたちの声がする。ほくの心臓は、世界一長い長距離走を走り終えたばかりのように、すごい勢いでドキドキしはじめた。

「オーガスト、今年同じホームルームのクラスになる生徒に紹介しよう。その子たちに学校の中を案内してもらったら、どんなところかわかるだろう」

男の子二人と女の子一人が入ってきた。みんな、ほくやママのほうに目をむけようとしめない。

「みんな、今日はきてくれて、ありがとう。オーガストを紹介しよう。今年新しく入る生徒だ。オーガスト、この子たちはね、幼稚園のころからピーチャー学園に通ってるんだ。新学期がはじまる前に知りあっておくといい。わかったかい？ この子はジャック・ウィルだ」

ジャック・ウィルは、ほくを見て手を差し出した。ほくが握手をすると、ジャックは少しにっこりした。

「やあ」そしてすぐに下をむいた。

「この子はジュリアンだ」トゥシュマン先生が言った。

「やあ」ジュリアンもジャック・ウィルと同じことをした。握手をして、作り笑いして、すぐ下をむいたんだ。

「それから、シャーロットだ」

シャーロットは、手をちよつとふつて、にっこり笑った。「オーガストくん、こんにちは。はじめまして」

「さて……と」トゥシュマン先生が、ゆっくり手をあわせた。「オーガストに学校の中をちよつと案内してくれないか？ 三階からはじめたらどうだろう？ 三〇一号室が、君たちのホームルームになると思うんだ。それから、理科室とコンピューター室を見せてやってくれないか？ あとは、二階の図書室と演劇ホールと、食堂にも連れて行ってくれ。よしっ！ それじゃあ、みんな出発だ。ここへは……」先生はそう言って、ママのほうをむいた。「三十分後でいいでしょうか？」

ママはうなずいたんだと思う。

「じゃあ、大丈夫かな、オーガスト？」

ほくは答えなかった。

「オーガスト、大丈夫なの？」ママが質問をくりかえした。ほくはママを見た。どんなにママに対して怒っているのか、わかってほしかったんだ。だけど、ママの顔を見たら、ただうなずいてしまった。だって、ママのほうが、ほくよりよっぽど不安そうだったから。

他の生徒たちがドアから外に出ているところだったんで、ほくはあとについて行った。

「じゃ、あとでね」ママの声は、いつもよりちょっと高い。ほくはママに答えなかった。

見学ツアー

広い廊下を通って、大きな階段へむかった。四人とも無言で、階段をのぼって行く。三階につくと、ジュリアンが、三〇一と書かれたドアを半分だけ開けて、中には入らずにこう言った。

「ここがおれたちのホームルームだよ。担任はペトーサ先生。悪くない先生だって聞いている。少なくともホームルームはね。数学を教えるときは、けっこうきびしいらしいけど」

「そんなことないよ。うちのお姉ちゃんは、すごく親切だって言ってたもん」シャーロットが言った。

「おれはそう聞いてないんだけど、どうでもいいや」ジュリアンはドアを閉めると、また廊下を歩きだした。「ここが理科室」ジュリアンは数秒前と同じく、ドアを半分だけ開けて、その前で言った。話しながら、一度もほくの顔を見ない。でも、ほくだってジュリアンの顔を見てないんだから、かまわない。

「見るほどのものはないよ。あの大きな黒いのは黒板。これは机で、こっちはイス。あれはガスバーナー。これは気色わるい理科のポスター。これはチョークで、これは黒板消し」

「黒板消しなんて、わかるに決まってるでしょ」シャーロットが言う。ちよつとヴィア姉ちゃんに似てる。「なにを知ってるのか、おれにわかるわけないだろ。一度も学校に通ったことがないって聞いたんだから」

「黒板消しなんて知ってるよね？」シャーロットがほくにたずねた。

「ほくは緊張しすぎてなんと答えていいのかわからなくて、ただ床を見ていた。」

「ねえ、しゃべれるんだよね？」ジャック・ウイルが聞いた。

「うん」ほくはうなずいたけど、まだ、だれの顔もちゃんと見てなかった。

「黒板消しがなんだか知ってる？」ジャック・ウイルが聞いた。

「もちろん」ほくはつぶやいた。

「だから言っただろう。見るほどのものはないって」ジュリアンが、あきれたように言う。

「質問があるんだけど……えっと、ホームルームってなに？　そういう科目があるの？」

ほくはできるだけしつかりした声を出そうとした。

「科目じゃなくて、クラスのアつまりよ」シャーロットが、ジュリアンのにやついた顔を無視して説明する。「朝学校についたら、まず行くところがホームルームで、担任の先生が出席をとったりするの。勉強はしないんだけど、学校生活の中心となるクラスで……」

「わかってくれたと思うよ、シャーロット」ジャック・ウイルが言った。

「わかった？」シャーロットがほくに聞いた。

「うん」

「よし。じゃあ、理科室は終わり」ジャック・ウイルが歩きだすと、シャーロットが言う。

「待ってよ、ジャック。ちゃんと質問に答えなきゃ」

「まだ質問ある？」ジャック・ウイルが聞いた。

「うん、ないよ。ああ、えっと、じつはある。君の名前はジャック？　それともジャック・ウイル？」

「ジャックが名前で、ウイルは苗字だよ」

「そうなんだ。トウシユマン先生がジャック・ウイルって紹介してくれたから、ほくははてっきり……」

「ハハハ！　ジャックウイルっていう名前だと思っただろ！」ジュリアンが笑う。

「なぜか、フルネームで呼ばれることがよくあるんだ」

「なんでそんなに髪をのばしてるんだよ？」ジュリアンがほくに聞いてきた。いらついているような口ぶりだ。ほくはなんて答えたらいいかわからなくて、ただ肩をすくめた。

「なんでそんな顔になったんだ？ 火事かなんかにあったの？」
「ジュリアン！ 失礼よ！」シャーロットが言った。
「失礼なつもりじゃないよ。質問してるだけだろ。なにか聞きたきゃ質問してもいいって、トゥシユマン先生も言ったじゃないか」

「今みたいな意地悪なのはだめ。それに、生まれつきだって先生が言ってたでしょ。聞いていなかったのね」
「ちゃんと聞いてたよ。だけど、火事にもあったのかと思っただけさ」
「おいジュリアン、いいかげんだまってる」ジャックが言った。

「おまえこそ、だまれ！」ジュリアンがどなる。
「オーガスト、さあ、もうとっとと図書室に行こう」ジャックが言う。

ほくはジャックのあとについてホールを出た。ジャックはドアを開けて、ほくのために押さえていてくれた。まっすぐほくの顔を見つめながら。ジャックがちゃんとこちをむけて言ってるような気がしたんで、ほくは顔を見かえた。そして、にこっとほえんだんだ。だけど問題は、この顔のせいで、知りあったばかりの人にはたいいてい、笑ってるってわかってももらえないことだ。ほくの口は笑っても、他の人と同じように口の両端があがらないから。まっすぐ横にのびるだけ。なのに、ジャック・ウィルはちゃんとわかって、ほえみかえしてくれた。そして、ジュリアンとシャーロットがくる前にささやいた。

「ジュリアンは、やなヤツさ。だけど、きみも、言うべきことは言わなきゃ」

真剣な口ぶりで、力になってくれようとしているみたいだ。ほくがうなずいたところへ、ジュリアンとシャーロットがやってきて、階段をおりはじめた。ほくもシャーロットに続こうとしたら、さっとジュリアンが割りこんできたせいで、後ろへよろけてしまった。

「おっと、ごめんよ！」ジュリアンが言った。

けれども、ほくを見る目つきは、ぜんぜん申し訳なさそうじゃなかった。

初登校日

初登校日はものすごく緊張していた。心臓が、ドキドキなんて通りすぎて、バクバク破裂しそうだった。パパとママはいっしょけんめいほくを元気づけようとして、出かける前にほくとお姉ちゃんの写真を撮ってくれたりした。お姉ちゃんも高校の初登校日だったんだ。

学校につくと、まっすぐ三階の三〇一号室にむかった。あの日、見学ツアーに行っというてよかったよ。おかげで行き場所がちゃんとわかる。他の子たちにもじろじろ見られてたけど、気づいていないふりをした。

ホームルームの時間、ペトーサ先生は出欠を取り、全員にファイルを渡した。そのとき、まだ空いているのはぼくのとりの席だけだと気がついた。少し離れたところで、二人で一つのいすにすわってる。

「ヘンリー、その空いてる席にすわりなさいね」先生がぼくのとりの席を指差した。ヘンリーは、いかにも移りたくなさそうだ。バックバックをずるずる引きずって、まるでスローモーションみたいにやってきたからね。そして、どさっとバックバックをおろすと、机の右側に立てて、ぼくとのあいだに壁を作った。

親切を選べ

ベルが鳴ると、あたりはごったがえした。時間割表を見ると、つぎは国語の授業だ。ぼくは、とにかくさつと教室を出て、廊下を急ぎ、三二一号室のできるだけ後ろの席にすわった。とても背が高く、金色のあごひげをはやした先生がいる。ブラウン先生だ。先生が、大きな文字で黒板に書いた。

先生がジャックを指差したのがおかしくて、全員どっと笑っちゃった。
「九月の格言」をノートに写したら、がぜん学校を好きになれそうな気がしてきた。

昼休み

ランチの時間。ぼくは、だれもないテーブルに一人ですわった。まわりはみんな、グループで昼食を食べている。下をむいていても、見られているってわかった。おたがいにつつきあって、横目でぼくを見ている。じろじろ見られることなんて、とくに慣れていると思うんだけど、そんなことなかったんだな。ぼくのことをひそひそ話している女の子たちもいた。手で口をかくしているからわかるんだ。その子たちの視線やささやき声が、つきからつぎに飛んできて、ぼくにぶちあたる。

「ちょっと、この席空いてる？」

ぼくが顔をあげると、女の子が、食べ物でいっぱいのおトレイを持ってテーブルのむこう側に立っていた。

「えっ、うん」ぼくは答えた。

女の子はトレイをテーブルにおろすと、バックパックをどさっと床に置き、ぼくのむかひにすわった。そして、マカロニチーズを一口食べた。「あーあ。あんたみたいにサンドイッチ持ってくればよかったなあ」

「うん」ぼくはうなずいた。

「ところで、あたしの名前はサマー。あんたは？」

「オーガスト」

そのとき、別の女の子がやってきた。「サマー！　なんでここにすわってるの？　もどっておいでよ」
「混んでるんだもん。ここにきなよ。いっぱい空いてるよ」サマーが答えた。

女の子はちょっと困った顔をした。そして「好きにしなよ」と言って、離れていった。

サマーは、なにあれって顔でぼくに笑いかけた。「ね、あたしたち名前の相性がいいね」
ぼくがなんのことかわからないでいると、サマーはこう言った。

「サマーの意味は夏。オーガストは八月」サマーは目を大きく見開いてにこっとすると、ぼくが理解するのを待ってくれた。

「あ、そうか」ぼくは一秒後に答えた。

「このテーブル、夏のランチ・テーブルにしちゃおうよ。夏の名前の子だけがすわれるの。そうねえ、六月って意味のジューンとか、七月って意味のジュライって名前の子いたかなあ？」サマーが言った。

ランチが終わるころには、このテーブルにすわりたければすわっていい子と先生のリストがすっかり完成した。ジャック・ウィルの名前を夏に関係させる方法まで見つけ出したんだ。「ジャックはうみにいる」ってね。「だけど、もし夏の名前じゃないのに、あたしたちとすわりたがる子がいたらどうする？　親切な子だけ、すわらせてあげることにしない？」サマーが真剣な顔で言った。

「いいよ。冬の名前でもね」ぼくはうなずく。

「イケてるじゃん」サマーが親指を立てた。

サマーは夏っていう名前がぴったりの女の子だった。日に焼けて、葉っぱみたいな緑色の目をしていた。

バダワン

その夜、ぼくは、頭の後ろの小さな三つ編みを切った。

お姉ちゃんはそのを見て怒った。「のばすのに何年もかかったのに！　なんで切っちゃったのよ？」

「わかんない」

「だれかにからかわれたの？」

「ううん」

「かんとんに切っちゃうなんて、信じられない！」

お姉ちゃんったら、えらそうに。そして、ぼくの部屋のドアを思いっきり閉めてしまった。

そのあとパパがぼくを寝かしつけにきたとき、ぼくはベッドの上で犬のデイジーを抱いていた。パパはデイジーをやさしくどかして、毛布の上でぼくのとなりに横になった。

「おい、オギー、ほんとうに大丈夫だったのか？」

「うん、ぜんぜんへいきだよ」ぼくはうなずいた。

「一晩中、ずっとおとなしかったじゃないか」

ぼくはうなずいた。パパがだまっていたんで、一息ついて、ぼくは言った。

「あのね、へいきどころか、なかなか気に入ったんだよ」

「そりゃよかった、オギー。ママの言ったとおり、学校へ行って正解だったようだな」パパはぼくのひたいにキスをしながら、小さな声で言った。

「うん。だけど、いやなら行くのをやめていいんだよな？」

「そういう約束だ。だけど、その理由にもよるな。パパたちに説明してくれなきゃ。思っていることや、なにが問題になっているのか、教えてくれよ。いいか？　ちゃんと話すと約束するか？」

「うん」

「それじゃ、聞こう。なにかママに怒ってるのか？　今夜ずっとママに対して怒ってるみたいだったけど。

なあ、オギー。おまえを学校へ行かせることなら、責任はパパにも同じくらいあるんだぞ」

「いや、パパよりもママのせいだよ。ママの考えだもん」

そのときママがドアをノックして、部屋の中をのぞいた。「おやすみを言いに来ただけよ」ちよっとためらっているみたい。

「三つ編みを切っちゃったそうね」ママはベッドのすみのデイジーのとなりに腰かけた。

「今日はママがオギーを寝かせたらどうだ？」パパはベッドから立ちあがった。

「ヴィアのようにすを見てくれる？」ママはパパに頼んで、ぼくのとなりに横たわった。

パパはドアのところで立ち止まり、ふりかえった。「ヴィアがどうかしたのか？」

「ううん、っていうか、少なくとも本人は、べつに問題はないって言ってるわ。だけど……」

「ふうん、子どもってのはいつもなにやらあるもんだな」パパはぼくを指差してウィンクをした。

パパがドアを閉めるとすぐ、ママは本をつかんだ。ほっとしたよ。話をしたがるかと心配だったんだ。今は話したくない。ママも話したくないみたいで、ページを開いて、声を出して読みはじめた。

なぜだかわからないけど、ぼくはとつぜん泣きだしてしまった。ママは本を置き、両腕でぼくを抱きしめてくれる。ぼくが泣いてもママは驚いていないようだ。

「大丈夫。大丈夫よ」ママがぼくの耳にささやいた。

「ごめんさい」ぼくはしゃくりあげながら言う。

「しーっ。あやまることはなにもないの」ママは手でぼくの涙をぬぐった。

「ママ、ぼくはどうしてこんなにくいの？」ぼくはささやいた。

「ううん、オギー、そんなこと……」

「わかってるんだ」

ママは、ぼくの顔中にキスをした。ぼくのたれすぎた目にキスをした。パンチをくらったようなほっぺにキスをした。カメのような口にキスをした。

ぼくをなぐさめようとやさしい言葉をかけてくれたけど、言葉でぼくの顔を変えることはできない。

ジャック・ウィル

ホームルーム、国語、歴史、コンピューター、音楽、それに理科の授業で、ぼくはジャックといっしょになる。どのクラスの席順も先生が決め、ぼくは必ずジャックのとなりの席になった。きつと、ぼくとジャックをいっしょにすわらせるようにと、校長先生に言われたんだろう。ぼくはジャックと教室を移動した。ジャックは、他の子がぼくをじろじろ見ているのに気づいてるはずだけど、知らないふりをした。

あるとき、ぼくは、階段をいきおいよく下りてきた八年生にまともなぶつかって、転んでしまったことがあった。八年生は手をさしのべながら、ぼくの顔を見て「わあっ！」と叫んだ。そして、ほこりをはらうようにぼくの肩を軽くたたくと、友だちの後を追った。どういうわけか、ぼくとジャックは吹き出してしまった。「あいつの顔、すっごくおかしかったな！」席につきながらジャックが言った。

「うん、そうだよな？ こんな感じ。『わあっ！』」

「ぜったいもらしてたぞ！」二人であんまり大笑いしてたんで、ロッシェ先生に注意されちゃったよ。

しばらくして、ジャックが小声で言った。「他の子たちをぶつとばしてやりたくなかったことある？」

「かもね。わかんない」

「ぼくはぶつとばしたいね。水鉄砲とか、こっそり目につけておけよ。だれかがじろじろ見たら、そいつの

顔を水をかけてやるんだ」

「君たち、授業中は静かにしなさい」ロッシェ先生に注意されちゃった。

ぼくたちはうなずき、教科書にむかった。そのとき、ジャックがまたささやいた。「オーガスト、ずっとこのままの顔なの？ 整形手術とかは受けられないの？」

ぼくはにっこりして自分の顔を指さした。「あのお、この顔は整形手術後の顔なんだよ」

ジャックはおでこをぼんとたたき、ものすごい大笑いをはじめた。「うひゃー、おまえ医者を訴えろよ！」
今度は二人とも笑いすぎて、ぜんぜん止まらない。先生がぼくらの席を離しても、まだ笑っていた。

チーズえんがちよ

最近、気づいたことがある。みんなは、ぼくの顔に慣れてきたはずなのに、だれもぼくの体に触れたことがない。先週の木曜日、ダンスの授業——つまり、ぼくが一番嫌いな授業——で、アタナビ先生が、ヒメナ・チンとぼくを二人組にして踊らせようとした。そのとたん、ヒメナがパニックに陥った。オロオロして、まっ青になり、たちまち冷や汗をかきはじめ、トイレに行かなきゃとか言い出した。とにかく先生は、ヒメナに無理強いしなかった。ぼくをだれかと組するのをあきらめたからだ。

このビーチチャー学園では、ぼくにさわると、なにか大変なめにあうってことになってるんだ。グレッグの『ダメ日記』の「チーズえんがちよ」みたいなんだと思う。その本の中では、バスケットボールのコートに落ちている古いカビのはえているチーズにさわると、えんがちよってことになっている。ビーチチャー学園では、このぼくが、古いカビだらけのチーズなんだ。

ハロウィーン

ぼくにとってハロウィーンは、世界一すばらしい行事だ。だって、お面をかぶって仮装できるんだもの。他の子たちと同じようにお面をかぶって歩きまわれば、だれも、ぼくが変な顔だなんて思わない。だれにも、じろろ見られない。だれにも、ぼくだとわからない。毎日ハロウィーンならいいのに。そしたら、みんな、ずっとお面をかぶっていられるのね。今年のハロウィーンは、ボバ・フェットになることにしている。

ハロウィーン当日の朝、お姉ちゃんは、わんわん泣きまくっていた。パパは仕事に遅れそうだと、さかんにお姉ちゃんをせかしていた。「ヴィア、行こう！ とつとと出かけよう！」

パパはたいてい、ものすごく辛抱強いんだけど、仕事に遅刻するのは嫌がる。パパがどなると、お姉ちゃんはますます大声で泣きだした。それで、ママがお姉ちゃんのめんどろをみて、パパがぼくを学校へ送っていくことになった。

「オギー、すぐ行くぞ！ パパは会議があるから、遅れると困るんだ」パパが言った。

「ぼく、まだ衣装を着てないんだよ！」

「じゃ、とつとと着てくれ！ 五分以内だ。外で待ってるぞ」

ぼくは大急ぎで自分の部屋へ行つて、ボバ・フェットの衣装を着はじめただけだけど、その衣装を身につけるのは、かなりめんどろで時間がかかるとわかっていた。パパが待っているんだ。もしぼくのせいでもっと遅れたら、すぐいらだつだろう。それで、最後の最後になって、去年着たスクリームの衣装を大あわてで着た。ぱつと楽に着られる衣装だ。長い黒マントに大きな白いマスクだけだからね。

「ジャンゴ・フェットになるんじゃないかなかったのか」ぼくが外に出ると、パパがいった。

「ボバ・フェットだよ！」

「そうかそうか。どつちにしろ、この衣装のほうがいいぞ」

「うん、かつこいいよね」ぼくは、そう答えた。

その朝、学校の廊下を歩くのは、サイコーの気分だった。なにもかも、いつもとちがう。いつもは下をむいて、できるだけ人に見られないようにしているんだけど、今日は顔をあげて歩いた。ぼくとまったく同じ仮装をしている子が、すれちがいがまにハイタッチしてきた。だれなんだか、ぜんぜんわからない。そいつにしても、ぼくがだれだかわからない。ふと思ってしまった。もしその子が、マスクをかぶっているのがぼくだと知っても、同じことをしただろうか？

教室に入ったら、最初に目にとびこんできたのはダース・シディアスだった。マスクをつけ、大きな黒いフードをかぶって長い黒マントを着ている。もちろんジュリアンだ。ぼくがボバ・フェットになると知り、ぎりぎり衣装を変えたに決まっている。二人のミイラと話をしていた。マイルズとヘンリーにちがいない。

ぼくはなんとなく、三人の近くにむかっていた。話し声がよく聞こえる。

ミイラの一人が言った。「ほんと、あいつにそっくりだよな」

「とくにこのあたりが」ジュリアンの声だ。ダース・シディアスのマスクの目とほおに指をおいている。「でもさ、もつとよく似てるのは、干し首だよ。見たことある？ あいつそのものだぞ。おれがあんな顔してたら、きつとなにかあっても、いつも覆面してるよ」ジュリアンの声が笑いながら言う。

「おれがあんな顔だったら、自殺しちゃうよ」二人目のミイラの深刻そうな声が聞こえた。「毎日鏡を見て、へいきでいられるわけないだろ。つらすぎるよ。みんなにいつもじろろ見られるし」

「じゃ、なんであいつとよくいっしょにいるんだよ？」ダース・シディアスが聞いた。

「知らないよ。今学期がはじまるとき、トゥシユマンに、いっしょにいてやれって頼まれたんだ。きつと、

どの授業の先生にも、おれたちを必ずとなりの席にするように頼んだんだと思うよ」そのミイラは肩をすくめた。ぼくは、あの肩のすくめ方を知っている。声も知っている。もう、すぐさま教室から飛び出して行きたかった。だけど、そのまま立って、ジャック・ウィルの話のつづきを聞いていた。

「だってさ、あいつ、いつもおれにくつついてくるんだから、しかたないんだ」
「ほっときやいだろ」ジュリアンがいった。

ジャックがなんと答えたのか、ぼくは知らない。だれにも気づかれなのまま、教室から出てきたんだ。階段をおりながら、顔が燃えるようにほてっていた。衣装の下で、汗が出てきた。そして、ぼくは泣きだしていた。がまんしきれなかった。涙で前がよく見えない。どこかに姿を消してしまいたかった。飛びこんでしまえる穴がほしい。ぼくを丸ごと飲み込んでくれるような、真っ暗な小さい穴がほしかった。

ぼくはトイレに入った。だれもない。個室の鍵をかけ、マスクをとって、ただ泣きつづけた。いったいどのくらい泣いていたんだろう。それから、保健室へ行き、お腹が痛いと言った。ほんとうのことだ。お腹をけとばされたような感じだったから。モリー先生は、ママに電話をして、ぼくをソファに寝かせた。十五分後にママがやってきた。

ぼくとママは、家までずっと腰に手をまわしあって歩いた。ぼくは、なにがおきたかママに言わなかった。しばらくして、トリック・オア・トリートへ行けるくらい元気になったかどうかママに聞かれ、ぼくは行かないと答えた。すると、ママはものすごく心配した。毎年ぼくがどれだけハロウィーンを楽しんでいるのか、よくわかっているからだ。

つぎの日の金曜日も、ぼくは学校へ行かなかった。もうぜったい、学校なんて行くもんか。